



• 0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99 100 JAPAN TAURUS

朝夷巡嶋記全傳第六編卷之三

村田

後輯第五十三

家廟投入花  
弟迎常葉枝

東都 曲亭主人編輯

再說稻向判五ハ義秀一二共侶小田鶴媛の亡體を立んとせる  
程よ次の日小人わざうち嘆たつ。韓楮の隔亮とやうす推切つゝ。是  
別人すらぞ廣光妻良井へ當下判五一三小ハ敬鷲名又歎ひ。誰もうん  
とせひよ小三二とあ母御よエ。かん身も差る事一欵。大慈の息子がりよどや。  
圖らうりけの騒動。殊も女僕。稚兒へ側杖打れひど也。とまくうるの  
祐。これ彼女は故く。と回暇多至。とりが浅良井小隣を進む。否  
小ニ次も恙ふく。庖舖のく不傳。かうかと嚮不御内ある人が殺され

とも危くええ。折加勢と詣んとひへ。小二三が身と援て背門より出で。彼  
此ある里人ふよと告。駆催とかり來ぬれど。朝夷ぬの武勇よろて。伏  
き草賊ホリ一箇も送て。數々殺され。又彼鐵盾矢藤五も辛と逃亡。  
うちおのづからひるがれ里人達とひそかに伏ふ背門より立つて。又御内  
人の浅瘡ひつりのあわれ。そを勦りて膏肓を打せゆ。又草賊ホグ亡骸と  
そをまき。鮮血の汚穢とあらしきと洗拭みどせ。程々聊時も寝り。が。  
さく里人ホと還へる件の事の趣と報まあせん。とひつて次の間もあられ  
ど。朝夷ぬと物ひの最中もゆつけられ。言葉の腰と折らどと。ひとり彼  
外は侍り甲斐。朝夷ぬのうゑも。向むとよくゆえり。今さうとへ誰がう  
も危うけ。禍鬼と輒くうちも禳なれば。御内さるの入クふ命と隕せり。の  
ゆき。その欲びは。ふと痛いた。幼々あるのと。ひつ眼包と推拭ひく。  
義秀ふうち對ひ絶て久た朝夷ぬ。が。夫主役の危窮とあつて放れ  
て。が。を。盗賊と。敷き拂ひ。ひへ。敷たの中う飲びの再會にて。ゆき。と  
音稱て己ざり。を。義秀の波ゆ。そと。譽も。不。先ゆ。と。叔仰より。も。の。勧だ。  
才の心づり。大々。ゆ。ぬ。と。み。妻も。不。え。先ゆ。と。叔仰より。も。の。勧だ。  
鄙小危窮と。孫を。そと。里人を。駆催セ。と。現。その才覚。あ。わ。寔。よ。古  
妻あつた。と。嘆賞され。一。三。も。判。五。も。共。よ。感嘆。と。七。の。ま。よ。月。だ。  
友鶴が長老。病著。又身あり。裏の事。多く。資られ。と。ま。く。う。ち。う。き  
く。車。ふ。ど。よ。あの人。ざ。の。微。り。せ。や。う。る。き。の。ミ。よ。よ。死。趣。舍。政  
す。と。報。を。呼。て。義秀の。よ。く。稱賛。を。り。け。さ。く。ひ。る。程。よ。る。黄昏時。

きり一ヶ判五ひ龙右をえりて。りつまでかくてゆるべど孫が亡骸を食ふよ誘  
ゑとそ方と起せば衆皆齊一うち列立て。縁頬より出とす。ああ庭下  
駄一隻。坐判五ひをゆくれを。朝東ぬ。先坐す。我們三人へ背門より  
遠らひゆと歸て。りくせば浅良井も一三も後方ふ跟て。退だけは雨程不  
義秀ひもが。尽庭ふち出で。卷石傍ひのちこと。一樹枝よ添て。只。乾淨  
房よ赴けば。打拔ねる障子の隙。燈火の光幽す。彼へ持佛のゆく  
きん。どどひを。近つて。判五ひまき坐て。本は義秀の性急れば。ひき  
縁頬よ登りて。障子を覗落哩と推用て。進み入らんとも程よ。ひか  
えを。一箇の女僧が。嬰兒抱を。前回ふ立ち。義秀うちを。うち散馬など。母れ  
圖らひ。對面。何の程よ。この処。おひけんと向せも果ぜ。右より凡縁。  
數珠ぬり揚て。丁々度矢とうち居て。涙よ暴す。声を戰。別坐を。ようも曰  
歳雨ふと角れ。日ふ賜まれ。昔の絶。あゝ。に旅宿ありて。寢れ。冬  
目あら肩親と。えられ。の不思。残さ。おと先を。推せ。が乳母を。親と。只  
折檻の數珠。親侍と。佛の慈悲智者。あも千慮の一失め。愚者。あも一  
得。あもぞ。ひと箇ち。む。諒言の。いと。えきりと。海。あら。不受容て。づくと  
寝ゆ。年來巡り。幽々。あ。身の風声。隠も。されば。いと頼。く。身も  
ゆり。又ゆると。危き。の。冒安。る。曾。ま。身。を。そ。を。づ。あ。せ。と。向。社。飲。初。受。養。そ  
歸きて。折。お。身。を。と。を。遣。脱。船。堀。親。子。銚。佛。木。と。慶。鑿。お。も。ひ。る。そ。方  
養育の恩義の爲。や。勇。敢。傳。き。と。う。と。も。鎌。倉。兵。和。田。殿。と。歎。と  
る。父。多。君。や。亡。母。君。の。遺。訓。を。そ。と。十。金。の。身。と。逃。と。單。列。と。裏。

而讐言ふ。うち向ひよりの偏か全謀の血氣よき。まことに讐へたるやう也。  
死のときをりある。とて宿りを殺をくへむ。ふる武勇ニ勝山主慶平  
太ホシ山寨へひそち趣むて衆惡と夷けぬ。畢竟を折枝ひとり。少  
女が小蔓をばそ聊む甲斐のふ似れ初へ送すあよされ。抗敵てふ  
氣類して大勇あめがぞ。有右衛圖らを環り會す。一二ぬ。嫌嫉す  
れ。おの女兒と娶りあら。その有身を知り。も下野を避。近くる友達を家  
遣す。はつともゆり捨て生氣のとり罪人とさりあらのうもあせだ。漸く  
寛社釋ても。尼妻奴子をそそぐ。只友人を赦す。生死を争ふ陸奥。戦  
場よ起る。より憂鬱よ泊堪ぬ妻子也。想死をさせぬ。再度の討も  
攻撃する。兎賊経性を設き捕て。鎌倉殿のをも。國の蠹蟲毒と交拂ひ。言見  
冠者と教し坐て。爲よ恥辱と雪あられん勢ひ已止と。ゆきりけん勇士の本意  
あぐれ。彼地史光仲ぬ。相伴んたられ。鎌倉殿より。まび徵を以  
義盛。召へま。推てあら要す。と。袖振拂て。陣中より脱れ去る。ア  
ハ光仲ぬ。他の功と竊もろとく罪せられ。吉見冠者ゆ。筋走。もの外を  
禁錮せられ。おん咎めの下條の。のを。もあく。あれど。彼人々。共侶よ  
鎌倉にあり。あら。誣奸口と。因み。ま。圖く。彼人々の資。これら。是  
うんと。おのゆりよ。高だ。名と取ると。お思ひの。秋已。を。深く。せと。その友達  
苦しき。鄙諧。の。佛造り。魂。入。被。よ。候。ア。よく。そも。あく。つま。人の怨  
ゆ。親よ勘當票たり。折。伺ひ。人よ。便り。ア。の。ゆ。ま。偏。と。勧解  
免す。あ道。も。先。お。心。怨。よ。遠離。あ。と。く。わ。ゆ。ば。併。時。ま  
病。よ。う。そ。お。母。君。の。恥。ら。ひ。て。憤。り。よ。堪。す。け。ん。お。も。う。刃。か  
伏。あ。見。を。折。え。を。き。よ。任。て。御。館。と。潜。び。出。す。後。の。ゆ。云。と。仰

送きせり。安房の田舎。鍤鎗取らて世渡。是れ爲め。又一生懶  
人の世。人を復り。父を今。更に。御遠言。情をうへ。勉学。ひく  
名を揚。身を起て。鎌倉還て。親を對面せよ。祈り。母君の恩  
慈愛。比詳。はり。をうち。死れて。依よ國。功める。今との時。備  
倉殿。の。弟。召うされ。従。親をも。下と高。我強た性根。をら  
直さん。母君。代え。老の杖。子と歌。と。持き。数珠。猪。手打断  
ら。并巡り。靈山。天地。利益。絶く。後の世。地獄。墮。悲。世ふ  
捨。れ。せ。捨。る。翁。捨。る。恩。愛。の。曾。浮。む。死。別。の。安。危。并。女。見  
小蔓。が。あり。後。世。の。障。り。ど。ど。も。只。心。ひ。出。く。世。の。風。声。耳。散。  
熊野詣。の。道者。宿。この里。人。と。西。立。道。つ。れ。ま。り。よ。具。す。ゆ。ゆ。  
翁。の。え。二。ぬ。の。う。れ。し。友。鶴。と。の。う。き。め。す。ば。小。蔓。不。似。う。り。大。蟲  
越路。を。巡。る。序。ふ。一。三。ぬ。ふ。音。つ。れ。締。の。虚。実。と。圓。が。天。飲。時。冥。よ。ト。さ  
稻向氏。一。う。ら。の。親。連。年。末。小。蔓。と。娘。育。の。然。ひ。も。の。ま。わ。と。こ。そ。よ。けん  
か。や。ま。死。と。ほ。ひ。そ。蘊。る。浮。世。の。塵。風。立。騒。荒。磯。波。や。三。國。の。浦。の。忘。貢  
忘。れ。て。年。と。歴。い。の。れ。と。れ。う。引。る。恩。愛。の。綱。身。狂。不。整。小。舟。よ。ゑ。の。里。ふ。春  
不。れ。折。う。佛。古。の。餅。配。り。と。く。わ。の。翁。呼。苗。られ。求。ま。く。杖。と。休。ま。く。  
法。捨。の。携。待。宿。も。盡。ぬ。縁。と。よ。ど。も。一。三。ぬ。一。丈。ま。ご。る。遭。初。見。參。の。人  
人。よ。海。松。の。如。く。矣。華。麻。の。法。衣。の。洗。す。死。乞。食。波。さ。く。よ。て。これ。如。此。多  
と。名。告。う。れ。や。知。れ。ま。は。是。非。も。ま。一。と。れ。く。名。告。う。死。身。の。爲。あ。の。小。蔓。が。爲。あ。  
恥。ま。べ。と。覺。え。と。外。か。く。そ。う。依。女。中。と。案。内。せ。護。持。佛。堂。お。敷。な。う。お。う。圓  
向。の。数。珠。が。接。く。う。ち。仰。瞻。新。位。牌。妙。真。玄。諦。禪。定。尼。建。仁。三。年。九  
月。一。日。孺。人。某。氏。五。十。五。歲。と。讀。れ。う。又。一。箇。の。新。位。牌。妙。孝。至。貞。大。善。女。

建仁二年癸亥四月十八日。俗名友鶴乳名小蔓。享年廿歳と誌され。六  
あらそりふと胸泣れ涙頻まく落て面向の念佛も出で。そ佛の御前へうち  
俯く。前後もまきうち泣くとやうやくおひえく。締の西女と且す。五月一日の  
精靈へ稲向ぬの配偶を。友鶴が養母あべ。至貞善女の灵前。水あま  
もむけ。あらゆみくらね。あらゆみくらね。あらゆみくらね。あらゆみくらね。  
身向られか母屋より嬰子の嘆声をあれ。友鶴の産あそ。遂か死をうぐふも。  
又れも音よ鳴く杜鵑子。子小ゆゑ子よ引れて竊ふ索く本をせまが。やほ歎  
死をまゆ。毒恩入爲報恩者と説せ。御仏の教よ懃る冥罪也。  
強禡の中よりも二十年往方も定まらず。女兒が死後よ逆縁の面向せま  
を苗られ。身の罪障を除き。阿三殿やあやめさと一二ぬ一も  
まき遭ひ。竊ふ坐てあらりやと。立まくもれど腰難く膝あちくも軟節難の  
杖小離れ心地と。又うち鳴てモ面向の鉢も紛れぬり。母屋のきも。う  
をう。嘆声。初孫あらべ外ふざも。貞アソヤバ切入り心遣アソム  
あら死ふと迷ひうのそ。薰。香の烟も胸も満て身とうに雲とアラキモ。疾の  
兩をきき。澄ぬ心と墨塗の法衣の袖を絞る折り。俄頃不烈れた母屋の騒  
動然行とも。おとづれ。陸奥より帰王めでて瞬間。賊徒を亡し。アソ。彼盜  
賊の頭深く鐵盾。うちの奴がも。嬰兒を搔攫く。金は振んと虎狼の強  
慾。両箇の翁よ禁められて。有繫よ。翁も撃難。言葉戦ひあらま。そ  
取て。ごく惜え。骨のいふく駆れて坐も。それ起つ居つ圍く障子のゆき。あ  
彼鐵盾が嬰兒を研ふ。揃く擲ち。勢ひ庭をうち越て。あの障子は滑ま。そ  
衝抜推すく。投入れゆ。この嬰兒を。あのまよ。おうどをう受苗め。つまふも  
あぬ物怪の半ひ身よ。一点ぞうも恙る。嘆んとも。を搖揚て。皺る乳頭を  
含せ。よ吸。一吸く歎咲々と。そ。併睡。まくまく覚ぬ。只是この見の命運。

の  
聚  
愛  
歡  
交  
人  
到  
宿  
家  
岩  
神  
録  
信



特よ勁きほのまるで年來巡りて靈山天地の神も護らせひけん佛も救ひを  
あひけん不思議といふものありわが辱さる就て肩落る涙を禁めぬ。本  
尊の正仏を且く拜みせりぬ。とあひびく翁達がん身をうのみ言ひて締  
定ス。ゆえに。この嬰兒へ去歳の秋友鶴が産一女の子を名を田鶴媛と  
す。とも。その餘のゆも巨細ふ。あひじられて又涙。只も時と移しぬ。これそ  
やてもありぬべ。この田鶴とあひ悉の意を。ひまざらあひ翁達。つまう  
障子ふ不意く顔對してよ。ひまば腹のぬくを怪ふ。情意剛意  
見。俗ふ外視八目秋甚聖と呼きて寛蓮でも。親ゆ勝きぬ人の道  
亡母君の教訓をと賢兎心よ思ひひとそ。とく。謙倉へ趣むか。やよ囁くと  
ケテ返も。言葉の露と衣の露玉をつらね。公道人情花も實有ある  
心の誠ひ猛く優く勇れ。鞞繪の尼と名ふ。眞す人柄アキセアシヘ義秀へ  
ちト免より。頭を低れると撃死。默然とてわからーと膝折直とく貌を改め。  
おひきとく母刀自ふ再會の歎びと述るふりまざ違ひあひて某が過失を論  
り至て緯の趣。一條とて理りよ稱ひどりとて。今世よと義秀が  
まごねをられんと他一人余誰うあるべ。只是實母再来の告言と承せられ  
ゆそ。あひもあひ身の左右のむか受笛られへ奇うるわ現身を護る神も佛も  
求めぐりとく外あひあひ。親モ神え佛え。景表み售里を立まること。別れ  
をまひて宵より。一日とてくあひ身の性方の心ふからぬ時もあればい。そ環りも  
あんとて岡の東ひよもゆく。四國九州の浦クまでうち巡りて旅宿。うらは黒敷  
みだ夢あひをまく。面影似る人も遇ひ。脣安くとどよ程よ。田藏人

光仲が尚井平をとて鳥鵠川の西へ走る。危窮とぞ身を拯れる。縛の  
趣如此々と近属奥の陣中かく彼はよ岐りと光仲が太田の社へ赴た。比  
及ひ。ナニ彼処のことをきく。とぞるあく走多め移へ靴を隔て上襷を拂。  
心地のこじくひ。彼光仲が歴迹も口の母の汲引は依り。あれらの奇遇  
のこじく。光仲はつと親友且そ親の樋口一郎兼光とぞ呼え。渠が大功  
あり。今毫毛も恩賞あり。遂く罪と蒙る。抑甚麼る政道也。又  
義邦へ残珪片玉鎌倉殿の宗族。且時夏と數を捕る。此度の軍功  
まふあく。某い鎌倉の沙汰をほま。知らず。ふた事も修習する。おん身の  
意見を。義よ稱す。又の非と飭る。不あらぬ。嚮よ某が光仲ホと俱と  
彼経任を數を捕す。義邦の為よと鎌倉殿の為よせざる。ひをさ  
鎌倉へあらび。名を取らん。と。親と。盾衝く。あらもす。  
ある。ちと。と。鎌倉の推參を。人の功を搔取す。己が譽を賣る。似す。と。ひふれ。推辭く。ゆゑ。と。頭をうち  
光仲の不測の罪を。あく。政事のよす。そりふ所。爲めゆゑ。と。ひく。頭をうち  
掉て。否かん。身を。そぞの。せ。そ。ひく。が。よ。これと異く。光仲ゆく。討ひの大將を  
伴ん。と。れ。推辞む。と。參る。そ。君と。重下を。臣子の方と。ひく。光。推參。鎌倉  
詣登す。恩賞の。推辞。ま。と。光仲ゆく。讓らん。誰か。う。と。か。う。と。  
免。誰か。免を。無礼といふ。智者。も。牛慮の一失ゆ。愚者。も。牛慮の一  
得ゆ。と。ひく。を。あ。そ。の。う。と。ひく。と。ひく。と。ひく。と。ひく。と。ひく。と。  
旅。も。あ。と。も。鎌倉まで。わ。そ。あ。き。と。この。田鶴。と。ひ。と。人。よ。産。と。か。う。と。  
子。あ。と。も。初見。参。わ。と。よ。よく。と。あ。ひ。と。と。懷。と。抱。と。寝。と。あ。と。と。

義秀がよきを苦悶する。外西史判五、三、良井と聚會す。  
程にて、金共侶が進み入りて、中に一二の揖めせ。うち微笑む。衝  
と寄りまく。呼々。大瀬のあ懷よ能そうと渡せられ。先の程より阿三  
とおふ説れ。談義へ聽く。誰とも袖を濡さぬ。絶て一人もうまくを入候  
ひも大々。田鶴翁の墨もあらず。そぶほり。身の懷よ熟睡。くわうるど。  
千々の土産と齎せ。二つともを。章出物稻向ゆの大喜大悦との見の  
頬のそろけんを。辯の腰を折らどと。金共侶は立在て。久しう彼首よゐの見。  
又改めて對面を。と隔え。辯は判五も腰を進め。年來嘆は侍候する。  
友鶴が実の母。と知て。齒を宿す。俗よ親の豪華集ゆく。これね竭ぬ  
縁ふ。某則判五。昔上総より。程り橋六と。呼れ。ふ兄の家督を嗣  
る。後。州異ゆて路遠。假名實名同。どうなべ。索く。訪易りし。を。  
一二更。がん身き。斯日。もうち。取扱合れ。昔と相譚ひ慰は。候て。氣を殺す。片  
手。然る。どりへや。田鶴媛が必死を救せ。ひる。か。身。則菩薩。年來信する  
宝珠山の地藏尊。もやう。もやう。と。おもむり。厚くて。彼首で辯を。ゆひ見。  
元ふ就て。友鶴。ば。ま。存命。す。か。彼孝行と容止の人。多く。挙げ。を  
誇。ま。せ。不。婆。く。よ。二十五日の夢の迹。覚て悔。在世間の花。月。嵐。雲。  
盛。が。虧。ると。知り。ま。悟。て。ま。恩愛の迷ひ。と。とりひ。て。落。涙。を  
拭。朝繪の尼。も。目。と。あ。び。て。な。く。恭。く。頭。を。低。め。ま。す。て。懇。切。る。ほ。か。  
辭。身。を。摘。め。哀。れ。て。の。限。り。う。恥。ま。八。入。よ。け。り。せ。渡。子。輝。の。廻。る。  
獨女と。福。禡。の。中。よ。親。ち。を。と。り。み。と。あ。く。進。ら。せ。と。り。年。長。て。索。て。本  
兎。の。う。な。も。因。と。主。票。ふ。る。一。三。ぬ。一。主。あり。子。う。阿。ニ。と。う。あ。よ。と。う。人  
停。よ。ひ。捨。く。て。外。あ。う。を。宿。所。の。夢。き。と。も。ア。ま。げ。く。門。邊。を。過。

仰りて竭ぬ縁と呼出られて誠ゆか心操の眞よ知るを教び仰り友鶴  
りりもよまでも仰る名と実の女兒よ異き。あくまの内養育の甲  
斐もさく先もて歎なを達と形見の娘兒見れ今偶のすゆき。慰めをよ  
ゆんぞうち續たる幸き。中推量りにて舜は盡がくもやうに況て  
阿三とあるこれ彼とて廢しむせのせれ。あかひどくやうす。皆  
過せむ。契りとて思ひ附れ一三ぬへ別れ。宣下庵との欲びも會  
話も見えれど。これも亦倉卒也。盡まぐも仰る。とりよ一三領を。そ  
の該のゆゑ。送の口誼りりじもよ。叔この女中ハ阿三と。友垣と結びる。  
吉見冠者の御内人江三の内室ゆく浅良井と。呼ばれ下野。舊  
里よ殃危の起。比より稚児連々長逗留。専女代り。迫使れて大く資を  
ね。方と六合まれ。浅良井も。鞆繪の尼と名告ぞ。來て止る夏。日のみ  
暮果て樹下閑涼。庭の草の葉と照る。董の衆人の魂と。客の神  
又置く夕露。秋とも。危悲。を。夢。あら  
鞆繪の尼が。揺揚て敲。を。者。二三。判。五。も。答。く。推。禁。も。否。措。を。の。該。へ  
冬。熟睡。と。けれ。物欲。うそ。あり。を。裏。裏。小母。の。鐵。背。蹴。られて。妻。時。仆  
乞。う。ど。奉。う。自。息。と。き。る。恙。も。あ。母。屋。遣。て。就。厭。事。が。乳。を。  
飲。せ。え。持。仏。堂。あ。皮。と。共。は。長。物。う。を。も。う。も。あ。み。や。阿。三。と。あ。母。れ。と。母。屋。へ  
伴。ひ。之。夕。饅。も。羞。む。く。意。本。い。か。あ。り。ど。を。あ。ら。せ。告。る。せ。ん。誇。と。く。と。を。笑。  
浅良井が。あ。ろ。あ。と。き。み。お。小。き。あ。と。お。乳。母。よ。遞。と。教。り。え。こ。と。え。を。つ。あ。り。と  
よ。よ。さ。と。く。鞆繪の尼が。衣。衿。が。披。く。懷。と。抱。取。て。生。憎。と。處。此。愁。愁。愁。愁。  
搖。揚。と。誰。が。よ。く。と。賺。と。そ。が。尽。先。よ。程。と。衆。皆。齊。一。身。と。起。て。後。堂。あ。セ  
ま。お。赴。た。け。折。う。外。面。騒。く。先。逐。ま。る。里。人。木。か。路。次。の。小。草。の。露。路。う。拂。く。影。絃。の。音。

りあく鎌倉より詫使あり。とく坐迎む。と頻々呼門罵る声。判官ゆき  
ひ賀うち騒だく。ある訝。何ひも豫て素内もあらず。夜門鎖る黒毛宿所。  
鎌倉より遙々と淀使の來臨あらぬ。あれも亦矢藤五郎。類ありやう。  
らん漫か門を推す。朝夷ゆふと報く。且一二と半と。を。がうせよ。  
僮僕共のき。立驅ぐ程。もわらぞ。外面。和田新左衛尉。常盛門  
前。衆居る馬。内下喜。江三廣光。腰越獸。六郎。本と相後て進  
まく裡面。四十人。後者。桃灯引提て前庭険。と  
續た。締の勢ひ。今。うちも措。死。対。判五。二。共。侶。衣裳と  
更。出迎。姓名と。意と。向。て。客房。案内。と。常盛。悠  
然と上座。署く。判五。本うち。對。當所。累世の里正と。稲向。判五。  
女。常盛。使と奉。來。別義。よめ。嚮。陸奥の戦ひ。  
賊主。経任。討捕。非常の功名。隠れ。朝夷。二郎。義秀。女。由縁。  
のれ。奥。この地。遷れる。將軍家。聞召。れ。翁。年。仰。る。  
且件の義秀。乳名。阿三丸。と。父。義盛。二男。る。此度。不  
あく。おはえ。ア。阿三丸。仙。時。故。ゆ。姫。母。采。み。と。り。ね。抱。  
遂電。そり。より。廿年。ち。月日。と。歴。れ。べ。の。常盛。お。お。老。當。腰。逃  
獸。六。も。と。の。面影。認。る。の。る。當時。父。阿三丸。よ。取。ら。し。る。俱利迦羅  
の。名刀。わ。り。今。も。肩。失。り。彼。人。れ。持。り。ん。ゆ。そ。の。疑。ひ。免。り。之。就。吉。見  
冠者。老。當。ま。江三廣光。義秀。と。疎。く。と。汝。あ。も。亦。由。縁。あ。り。れ。と。一。嘗。呑  
れ。一。冠者。ハ。転。居。よ。あ。と。り。ど。も。格。別。の。義。秀。と。り。く。此。度。某。よ。隸。い。と。す。  
義秀。今。宿所。よ。ゆ。と。の。旨。と。傳。よ。と。と。り。れ。て。判。五。二。本。ひ。る。頭。と  
據。て。常。盛。の。後。方。ま。廣。光。と。稍。不。平。く。疑。ひ。解。け。と。うち。笑。ま。よ。の。篠。ひ。大。々。

さふ。中あも判五の額の汗を邊へか拭す。謹て稟奉う御談う所をす。  
ま。朝夷生の道中。所勞よとすむをも。徒日と弥り。おもへ  
ゆく。帰矣せり。とくまく。撲ひゆん。と忘く立ん。とく程。義秀ミツヒコをも。衣  
裳を更く。置襖の蔭カケを。うち暖を。進ミ出常盛ミツヒラシ。對ひく某則義秀  
き。身ひき遠路の談使。逆送の礼整。失敬の野人の習俗。こよみづ用  
捨スル。既。詫意の趣。彼死シテ承ム。不肖の某期シテ。君父の元  
兄弟エチキ。既。詫意の趣。彼死シテ承ム。不肖の某期シテ。君父の元  
ら。綬葛倒ハシタリ。搢ハシタリ。本意。稱ハシタリ。らんや又。伯兄アキラを。この兒使ハシタリ立  
れ。綬葛倒ハシタリ。成ハシタリ。腰ハシタリ。父兄アキラ。相別れ。うち天ハシタリ一方朝野  
ぬを異ハシタリ。成長ハシタリ。父兄アキラ。相別れ。うち天ハシタリ一方朝野  
迦羅の短刀ハシタリ。腰ハシタリ。腰ハシタリ。此の名刀の奇特。よと。仇を殺ハシタリ。仇を殺ハシタリ。長  
退ける。きの靈應。あり。短刀ハシタリ。欲ハシタリ。九寸五分の短刀ハシタリ。長  
かんと欲ハシタリ。とた。二尺許の大刀ハシタリ。ともあれ。鎌倉。年。日。大人の脣  
紛れの。うも。只。この名刀の。う。某と衛育ハシタリ。彼女。梨ハシタリ。景裏ハシタリ  
頭髪ハシタリ。剪ハシタリ。捨ハシタリ。灵山。冥地ハシタリ。巡礼ハシタリ。圖ハシタリ。ぞも。宿ハシタリ。後堂ハシタリ。今  
あ。渠ハシタリ。亦。正ハシタリ。證人ハシタリ。某ハシタリ。よ。陸奥の陣中。あ  
先仲ハシタリ。相別れ。鎌倉。年。年。先仲も義邦も。不測の咎ハシタリ。を蒙ハシタリ。禁錮  
せられ。事の速ハシタリ。初。傍ハシタリ。駭嘆ハシタリ。せ。と。が。れ。推。系。侍。く  
彼人々の冤屈ハシタリ。釋ハシタリ。友垣結ハシタリ。甲斐。わ。ド。葉。も。薦。め。り。某。の。人  
矣。近。そ。首途致ハシタリ。と。と。折。く。この。充。使。を。出。船。追。風。を。獲。る。が  
如。り。と。缺。く。と。異。議。多く。言。手。を。せ。る。常。盛。も。亦。飲。び。と。す。ま  
ま。當。座。の。承。諾。某。ま。よ。面。を。起。毛。被。び。仰。り。れ。三。れ。か。加。ん。俱。利。迦。羅  
あり。木。も。う。證。拠。分。明。ま。し。人。誰。か。和。殿。さ。う。父。の。子。さ。う。と。の。だ。え

至れりゆめ。和殿軍功あるとて鎌倉殿より徵させられべ必もつかれ。  
親疎は依て大内ゆゑのを。君ゆも父ゆも待て。和殿を伴ふ族されば疎とも  
つらぐ者とぞ。昼夜を犯して來る。とく準備をす。かゝりとく義秀一  
議は及び。そゝもかゝも仕ん。切くこの曉き。うち寛だく体ひゆ。とよくむ  
ちか廣光も。義秀判五一二。ふよ別れ。後情義を述く。義邦より贈り。と  
る。書状を義秀走遞与。當下腰越獸六郎。ゆきゆき進み。之  
義秀は額どう。見覚ぬ。某トれど某へ御内人獸六郎。ゆきゆきのま  
ちへた。むし一大殿の仰を稟く。和子を追蒐。なり金澤。野高尾。  
昔く投されひ。が長生。甲斐あり。又を迎ひ。手あり。稚丸時の  
勇力。神さ。の馳せ。と身なり。僻夏。果して日本國中。名くる。  
勇士。きりひ。彼采ひ。もあよを。今宵。昔と語出。く笑る。ぐりひん。  
ゆめ。と真実。らしく。辯。義秀。微笑。縞ひひを。稱け。かくて夜。初更の鐘の音。それ。判五一三。共侶。義秀。袂を被く。諫使。へ舍兄。まと  
は。今宵。の宿。仕事。あく。あり。ふ端近。南向の別席へ。とくを常盛  
うち。ゆき。その談寢。ふき。あ。の晩。相共。必帰路。赴くべれ。とくを常盛  
とく。とく。彼采ひ。も對面。とく。向慰。さん。酒食の管。ゆき  
とく。二郎。え。家尊。の大へ。よ。贈り。あ。二種。ゆ。獸六郎。披露。を甚。と  
られ。腰越獸六郎。へ。外。立。と。兩箇。の。奴隸。が。昇。り。と。本。行。量。等。と  
披く。時服。一領。と。き。出。と。これを。縁。頬。あ。と。登。せ。常盛。の。若。嘗。兩。名  
信。濃。驛。の。太。く。逞。て。三。歳。駒。ふ。金。貝。磨。不。鞍。置。て。真。紅。の。厚。綱。被。り。ふ。  
庭門。あ。牽。入。け。當。下。腰。越。獸。六。郎。へ。義。秀。不。う。ち。對。ひ。く。物。云。云。と。謁。そ  
れ。が。義。秀。件。の。時。服。と。こ。び。うち。戴。な。う。東。よ。向。く。恩。と。謝。一。馬。と。二。臺。受。と。

と判五と共に常盛と小書院ふ誘引り。さて判五へ一二共侶猛酒食を  
安排。常盛主役を歎待と程よ常盛へ亦葉々對面。その誠意を感じ  
嘆。此度義秀も共に簫倉へねぐもんとくと叮寧よ勧やか。簫繪の  
尼を後り。むすり和子を抱たく君所をまかりゆり。簫繪御前の内選  
言を空をうせと考ひ。故にれば殿の罪をぬ。死としてふを仰るよ。今も  
夢をも替めゆく。和子の前途を立ゆれば。この年未の本意と遂に佛の道よ  
い。まう。一日も後世のひとみよ暇へ絶てる紀のをひそう簫倉へあがたの  
よ。やまとせあへども。うけハゲやわざりけり。又廣光へ後堂あく。浅良井小二は  
對面。判五義秀一三ふ。妻子ダ寓居の歎びを述べ。友鶴が死を悼み。且藤  
倉の爲体。義邦光仲の哀の趣と詳々報知。既にこの如くされど華ひよ  
ちく朝夷ぬ。此度彼地へ去れども遠くをもとす。主君も恩免のゆ汰もの  
歟。主役安堵の日より。この厄會ふを迎。とぞん小二も大人も。吉左右と俟  
く。といふ浅良井小二。ホ。聊憂と尉。久後頼く。心ひける。この時。簫繪の  
尼。小書院より退き。入る團居より。廣光の義秀の恩美の歎びと述  
べ。ト。嚮。義邦の計ひ。藁三郎と太田の莊へ遣す。古の顛末渠が故寺  
を。のこうだ。いと厚すた心操と。ひり出す。衆皆嘆賞せざる。そ。中ふ判五。心ひ。白ふ。簫繪  
尼。うち。對ひ。か。今尉廢の。常盛簫倉へねぐもんと宣せし。とうけり。ひさ  
ト。ホ。あしが。や。並ら。又。行脚。しく。仰。杖。を。曳。る。もん。願。す。あ。ま。足。と。駐。り。田鶴  
媛。を。字。育。の。ひ。某。既。よ。友。雇。と。妻。ひ。く。又。妻。ま。も。後。れ。と。ば。あの。男。妻。完。と。譲。  
あ。も。と。く。よ。鶴。育。ひ。た。この。義。な。り。わ。け。り。あ。と。又。他。妻。も。ろ。く。當。る。あ。そ。氣。ひ。の  
尼。沈吟。じく。そ。宣。と。ま。う。の。内。仏。は。は。身。の。俗。縁。よ。昌。ら。れ。孫。女。の。備  
せん。相。応。か。ぬ。所。行。り。る。あ。え。ゆ。れ。ど。友。鶴。が。難。育。の。恩。も。か。さ。そ。中。途。

あくまうなづかれて渠は代りて田鶴らを。稍東西を知るにあらず。やうや草の庵と  
締じて外までも後見せむ。これも亦罪障のむとよそほらめどより故に判五を  
ゆえ。義秀頗る領なく。つゞ母あよ歎である。某今は後まく君父仕事  
らん。さあもかくあもの下の翁の庇覆と漏きのれも。つゞ産せり女の子あく  
生六月後も頼りて田鶴へ外祖と進らせん人とのあくと。どのよ判五を  
含笑く。そん心安らべ。母ぬうり一三う。世帶と資けあひて田鶴媛の佳  
婿と。うき。仇とこの家と續せ。わみやでよと後々の商量早と整へ。一二も  
亦報ひて廣光夫婦共侶。又苗別の觴と。あとも西宴時巡り。一け。きる  
程。よ夏の夜の寝ぬよ明ると。卿言けん。昔の人の袖の香や化橘。あらま  
ども。ことも常世の長鳴。八声の鶏の促せ。常盛の役者。おが立ざふ  
と散動く。馬ふ屢穿ち草鞋の幼い。締く七居並び。すら間よ義秀へ  
行装を整へ。鉄撮棒と幾箇の奴隸们。扛擔へとく。常盛と共に  
出まく。判五一二を先と立く。鞆繪の尼。田鶴媛と。お抱た。良井を  
眠けぬる。小三二がを抜く。齊一日送る縁嬪の。母どうふのわる。廣光獸六  
と。馬牽けと呼入。口飼圍奴が四つ。うちや庭門ふ牽居体。  
馬の嘶鳴。勇じ死星同班。彼誰時北山下風涼。きよ路り。と常盛。  
判五ホを。うき。と。然ひを述別を告。を。休庭ふを。立く。内りと馬うち  
乗か。義秀の人々。辞別を。うひ。兄常盛。推ば。まく。ゆく。  
と。乗る駒の足搔。朝出立廣光。と。判五ホを。えくなりく  
獸六ホ。後まく。とく。後ひ。衡門の外面。根。丛。莖。平。穀。の奴  
僕。が。装沙。措手桶の。同々。竹帚を横た。推並び額を。つだく。僕  
萬福と。祝。正ふ是功成。う。故郷。ゆ。う。錦袋被。夜

道を。ゆく。如一と古人のひしん。義秀が。謙倉。かづ。現その時を得  
うれとく。譽めり。れ。る。な。り。ける。

濱相撲禄物

後轉弟五十四

小壺海大鱸

却説常盛。義秀と相伴。只晉路を。程。五月廿三日。録倉  
近く帰。あ。け。り。これより。人を宿所。走ら。く。先云云と報。く。義盛  
あ。を。欲。ひ。く。次の日の未明。よ。り。義秀木を。迎。よ。と。一两名の家隸。雜色奴  
隸と。相副て。要。越。を。遣。る。廿四日の己の時。を。り。小二郎殿の。元。者。を。今  
罵。り。騷。ぐ。よ。え。常盛。義秀。二騎。相並。び。今巷路の東。き。邸へ。か。れ。若  
程。ふ。在。謙倉の。老。少。男。女。を。を。と。そ。取。ふ。す。門前。宛市の。如。く。時。内  
くも。眼。ひ。り。する。程。よ。常盛。且。義秀。と。客房。よ。迎。入れ。さ。休。つ。く。  
掌。よ。卦。ひ。く。父。義盛。の。對。面。く。岩神の。丈。の。趣。義秀。づ。く。や。く。采。み。く。詠  
忠。一。ニ。が。義。膽。判。五。が。老。実。よ。至。る。ま。い。そ。の。又。も。呼。せ。く。隨。よ。ま。く。送。く。報。ふ。  
義。盛。ぬ。く。感。悦。く。駆。て。礼。服。を。整。て。呼。入。れ。て。對。面。を。當。下。義。秀。り。す。ま  
膝。を。進。め。く。額。つ。た。る。頭。を。擡。別。れ。ま。り。く。お。比。ハ。進。退。始。母。が。隨。意。忠。何。貞。  
ひ。り。う。だ。稍。東。西。と。知。る。よ。う。帰。系。の。情。願。わ。り。と。く。じ。る。う。一。牛。よ。う。も  
う。身。の。賤。れ。ま。直。羞。く。十八。年。の。月。日。を。歴。さ。う。然。す。と。今。圖。ら。ぐ。の。恙。き。尊  
顔。を。拜。一。き。む。欲。す。く。歎。武。が。匈奴。の。幽。と。ま。く。漢。朝。よ。還。り。し。も。よ。す。く  
そ。せ。と。憶。き。乳。ち。も。ろ。く。禦。あ。く。義。盛。頬。よ。感。嘆。く。適。男。子。ゆ。う。ふ  
す。し。一。妹。母。來。色。が。和。郎。と。抱。だ。く。ま。す。く。ふ。愆。よ。う。き。一。う。き。を。廢。海  
く。よ。り。れ。う。往。方。定。ふ。も。う。も。う。恥。て。縣。の。年。と。あ。う。た。か。か。妹。母。子。嬢  
の。教。道。す。れ。が。モ。和。郎。が。武。勇。と。行。状。と。世。の。風。声。も。隠。れ。る。且。又。け。ふ



常盛が詳ふ報るよとく。いふて虚名をうぬと知り。あらゆる彼琴きの尼が  
誠忠男魂のむきを。そりが理義より明る。これ亦竊か羞ることある。過て及ぶ  
りれどもむづのむづよも要す。大凡人の好む。その友ともとく。知とぞりふる。現  
吉見ヨ又田の人々和郎が友埴縛び。のふ。一器量を乞ひ。もの餘へ推く知  
翁の三光仲の幸ひ。其事は預けられて當第よりとども。いまが恩免を請う  
まし。對面と許さず。常盛已下の兄弟。親戚。今朝よう集合。く次の間小  
ゆん。とく寛ゆる。先不盃を取らせんと。童扈後が酌。立準備の土器を取  
ゆん。とく寛ゆる。先不盃を取らせんと。義秀が謹て飲く土器を返せと。先有とも  
ゆく三度傾けくわ。されば。義秀が謹て飲く土器を返せと。先有とも  
御覽せよ。とく。要す。俱利迦羅の名刀を脱とく。父の母とく。おさす。  
義盛の邊へ。受戴を。さんざう。現紛べくわ。あと俱利迦羅の  
短刀。これに是古幕府頬朝。よう恩賜の宝刀うけ。と。和郎が縁ふ二才の  
秋。病より。只管。不法師。ふとく。取らせ。と。母の  
鞘繪と喪じ。和郎え。往方のあれどなり。ふ。行處をとく。それ篤と  
つが見との宝刀と功成名遂く。とく。吉事へ。と。先の凶事に成れり。  
世に塞。翁。馬。る。も。り。よく私藏ち。とく。感涙數行。及び。と。不休。宝  
刀と返。け。父子の献酬を。更卑。とく。常盛も亦改め。く盃と。まと程よ。間の  
隔亮と。推用。とく。二男。二郎左衛門尉。義氏。四男。四郎左衛門尉。義信。七男。七郎秀成。八男  
五男。五郎兵備尉。義重。六男。六郎兵備尉。義信。七男。七郎秀成。八男  
八郎。義國嫡孫右兵衛尉。朝盛。青盛。の子。従父弟。桂平太。胤長。長の子  
ホ。と初。とく。三浦。土谷。山内。淡谷。横山。茂利の親族外戚。处陥。まで進と  
入。まく。食。義秀。不對面。あ。致び。と。途向後と契。まく。又献酬。時と。長。と  
亭午の比。より。これより先。義盛。一箇の家隸。と。執權時政の宿歎。

遣て常盛越の岩神より義秀とゆて海参のよ。云々と報知せ。ふを使  
者程もきくにて朝夷敵のひる。御所の山沙汰は依りて入江三廣  
光ひ。舊の如く桂柄平太は預け置ると。すく下知のひとよりよ。義盛則  
廣光を勞す。客房を酒食を羞め更に又一箇の家隸。雜色奴隸  
す副。廣光は相具して桂柄の宿所へ遣て程は增長も亦人々が先もて  
を歸り。桂柄は柳營の支卒小壺の濱の先假屋より相州善行の本  
署とも一通とて來まけり。義盛即披ひ。是義秀今朝矣。著のゆる。  
常盛を渠あそ小壺の先假屋へ至るべ。者へ軌達件の如。五月廿四日。  
と書れ。義盛これと常盛及義秀えんせり。先復翰と進。船く  
お使と返と程は常盛も義秀も猛。衣裳を整へ。各々後者を俱。  
父の辞り。歩きより小壺へありけり。義盛これを目送り。二郎がは看て  
は將軍衆の見參。すとと速く。吉事のうの吉事。らむ。寔は賀を  
ベ賀を。とひきごち含笑く。越路の供立。腰越獸六本と初手と。すて  
送き酒うち飲ひ。義秀が吉左右と。今くと俟うけ。との時將軍頼家脚へ  
色と好い酒と嗜み。歌舞蹴鞠の遊興。夜とく日は継だ。もの。の。時。  
富吉走柄の山獵。よりくの足。殆ど入る。小壺金次。魚獵。日と消ゆる。  
放逸嗜慾は限りゆきけれ。この日も北條相模。久義時。仁田四郎忠常。比企弥四  
郎。小坂太郎富部五郎。鬼田八郎。きど夥。近習を供ひ。小壺の濱も空  
ゆ。浦人。細を引いて。舟へ。ける。風波不順の故ゆ。おけん。獲物。雜食。  
まう。舟。氣色。う。も。され。是遊獵の甲斐も。よく潜没す。白水郎  
仰て石突明榮螺を捕ま。そくせ。アホ。久義時忠常奉アホ。浦人ホと  
呼。よ。縛云々と分付。浦人。お困ト黒く。御談。がゆ。今。の。小壺の

売を潛没する白水郎あま。といふを義時よしときがぞそりうる故ゆゑと向むかへ浦人うら。  
 さうの近属ちくろこのうちの洋中ようちのようちのをいと大なる鰐わいの雌雄めいゆう兩隻りょうせきひき。は、人食ひとくこと  
 知しし。裏あの濱はまの漁夫うぎふ浦平うらひらと呼よれる。鰐わいは隻足ただしゆきと咬かみ歛くらて忽地こゝ今いま  
 隕おちせり。浦人うら怕ひひそく没潛ぼくせんをせし。網引あみひきは幸さいのもの。件くだんの西心魚にしこいの  
 所ところ以もつて浦平うらひらが女婿めいじゆうけ。浦太郎うらたろうと呼よされた婦翁ふうのうの仇ご復ふくええをもく  
 き。釣つるを造つくり。網あみを修つくて。海鰐かいわいを捕つかふ。とせらるとせらるもあれど。釣つるも網あみも  
 そ浦太郎うらたろうの故ゆゑ。身上じょうじやうで衰うへて。女房めいぼう枝えだと何なにか。給事けいじふとく牛うし  
 す。彼かれはのまもゆき。鰐わいの便著びんしょくと失うしなつ。浦うら一人ひとり。困窮くにきゅうせぬ。あ  
 ざく。願ねがふ。上のうえのを威德いとくと鰐わいと退治たいぢ。かう。その時ときも。目前まくまくも。潛没ぼくせんも  
 す。浦太郎うらたろうは。左さる右うる商量りょうりょうを。所ところ詮じ推辭すいしを。とも免めんせられ。浦人うらは横ようたう。作つくりゆかそ  
 ありの海うみと惡魚あくぎの栖すむることを。浦人うらは横ようたう。作つくりゆかそ  
 わん。皆みな逃のがれよ。と敦園としづかの酒氣さけきのを。浦人うらは怕ひれ迷まつ。困こまづく  
 額あたまを集あつめ。左さる右うる商量りょうりょうを。所ところ詮じ推辭すいしを。とも免めんせられ。浦人うらは横ようたう。作つくりゆかそ  
 わく。圓わいを。りて當あらわせ。を。半はんく。鰐わいを。捕つかふ。とれよう外ほかへ。と。各かく圓わいを行く  
 程てい。浦太郎うらひらが。半はんに。されば。それ。よそ。散動さんどうを。人ひと食くふ。然しかる。浦太郎うらは  
 駭憂けいゆひく。取とる紙藏しじやうを。傍そばの投捨とうしを。と。何なにぞ。これ。が。弟おとこの襄よ少す郎ろうを。  
 けの役わくを。駆出しゆしゆさる。わせや。もあく。まき。と。網引あみひきの入數いりすうを。みけん。べき。時ときと。も  
 出でよ。と。ど。う。隊たいを。入いれ。る。各かく位位と。格別くわくべつ。入いる。の。圓わいを。ゆく。び。取とる。と。吾われと  
 え。ば。う。と。勸解くげんを。と。衆しゆ皆みな。皆みな。ゆき。と。各かく位位と。格別くわくべつ。入いる。の。圓わいを。ゆく。び。取とる。と。吾われと  
 看病かんびを。とも。當役とうやくが。四帷よみ列�て。との。圓わいを。當あらわ。と。讓あらわ。と。誰だれ。受うけ。金かな。償めぐら  
 あ。ま。れ。ど。鰐わいが。和主わいしゆの仇ごえ。ば。討う。怨うらを。も。本ほん意いを。ば。や。と。の。れ。浦太郎うらひら喧けん嘵さう  
 堪うた。うた。不ふ稱ちゆうす。うた。よ。鰐わいが。婦翁ふうのうの仇ごえ。よ。うた。ま。も。き。れ。る。千尋せんの

第五編  
 卷の一  
 ある出  
 像并よしよ  
 姓氏目  
 錄中よ  
 浦太郎うらひら  
 を傭書よしよ  
 もうて  
 浦二郎うらひら  
 とき同よ  
 編四の  
 卷う  
 本文よ  
 浦太郎うらひら  
 とある  
 ベー

底に潛りて。誰うそく彼鷦と殺え。忽地よの腹中より葬られたり。疑ひて浦  
平との吾仲との海にて翁船塔が西魚のあふ命と限ある。只是過世の業報か  
の見づか夫婦同胞うちも揃て命運薄く非命は終を取る。と怨む  
あらざ左右袖よ涙と押拭へば衆皆歎めかべども義時忠常御詫を  
傍へ催促をあらはれ。継云云と宿をあげ浦太郎を扁舟に乗じて先立ち  
奥へせんとく準備。暇見る折々傳告の青侍御假屋よりあら和田  
常盛召ふよ。朝夷三郎義秀と弱く病りと嘔えあると頼家もくさ  
あらく義秀欣然不乐。常盛共侶あると召べ潜没の技。今要時後ふ  
ををぐれ浦太郎とうひすみそのと根屋のゆとりふ苗置てその餘のひだり退  
せまし。とひそぐとぞ。近習の輩あらぬと云云と相計。朝夷遅と僕程。  
和田新左衛門尉常盛。義秀と相具してちやか假屋よをり。頼  
五と府覽じて新左衛門尉遠跋の使節速よ急と發參著丸社。やうり  
現義秀が面魂。勇力もさをあら。その筋骨力と試へ。角紙の勝負を優る  
よ。誰うちの濱邊あら。義秀と雌雄を決せん。角紙よあら。とての  
多く坐よと仰されども。豫てとう至義秀の勇力武藝耳。相あら。うなへ  
らんとよりれきて。逡巡とものこされば。かん側よ傍りて。義時これを眞目よつて  
進み對り。稟をす。義秀は。雙の勇士武藝を又熾熱されども。角紙の  
技も長じ。が。互に。争供の杜校。おほ道が敵である。んむ。おもき。見ゆ。ば。  
但一當盛も亦坂東かく。一二を争ふ。勇士。角紙の。おもき。好く。く  
よく。上院。あれども兄弟。立あつて。商ひ。一ト泡血。か。深き。ト。ま  
し。墨。頼家卿うち。會あつて。領取の。そつて。一ト段を。ほく。さんく。と。そ  
ぎ。おも義秀後ひ。まく。義時うち。對ひ。御詫を。辞ひ。か。おも。い。の

惶恐く坐じる。角触勝負の烈れに於て兄が弟小勝ゆ。人倫のうへ害す。  
偶真ウツマサが參て常盛が勝ひて長少の礼是より乱れて、元宗牆カムジマツキは其妻カミ。  
この妻カミ聽きせめり。と憚カク氣カキもあ。論タチをくらへ。頼家卿カミをさへ  
所理あるか似スルれど大丸君オウマルは仕ハシメり。私親ワシンりく辯ハダばくばく。のんやあきら  
一時の奥アシり然ハラカニと推辞ハシメりをうそハシメらせる。私親ワシンりく辯ハダばくばく。のんやあきら  
や。と焦躁カモトせば義時忠常辭ハシメを盡ハシメす。口カミへ懇切カミツケ。仰アガと固辞カミツケ。  
毛ウツマサ比ヒ官カン令廣元カミツケが進ハシメらせ。鮮明月毛カミツケと名づけ。特不愛カミツケもひれされ  
あく立ハタクらんとハタクけ。頼家要時ハシメと勇ハタクせ。先乘替ハシメの駿足ハシメと假屋ハシメ  
用ハシメ牽ハシメ出ハシメて指ハシメす。宣ハシメふや。常盛義秀彼ハシメとよ抑ハシメ彼駄馬ハシメ  
近ハシメ比ヒ官カン令廣元カミツケが進ハシメらせ。鮮明月毛カミツケと名づけ。特不愛カミツケもひれされ  
ど。福物ハシメ牽ハシメたり。これを心の煥ハシメかく。勝負ハシメと争ハシメよ。仰アガきま。不營益  
義秀阿ハシメと在りふ。答ハシメうて。遽ハシメく。かく前ハシメを退ハシメく。脚假屋ハシメの前ハシメ面ハシメ。腰ハシメ  
真沙路ハシメ立ハシメく。衣裳ハシメと脱ハシメて。残馴松ハシメの枝ハシメ内ハシメり。とうち被ハシメ。數名の雜色  
沙石ハシメと集ハシメ。俄頃ハシメ土儀ハシメを造ハシメ。生ハシメ。小坂太郎ハシメ仰アガと稟ハシメ。行司ハシメの役ハシメを  
候ハシメ。やがて兄弟東西ハシメ立ハシメ。土儀ハシメの中に進ハシメ入ハシメ。呼吸ハシメと攢ハシメり。虚実ハシメと聞ハシメい  
豫ハシメ。鮮明月毛カミツケと渴望ハシメ。折ハシメわく。乞ハシメり。すまう。賜ハシメと與ハシメり。毛  
月ハシメうちふる。一ハシメ只ハシメ管ハシメ。勝負ハシメを好ハシメ。捩倒ハシメえと角ハシメへど。義秀ハシメ此ハシメも動  
き。壯裏ハシメふる。今家兄ハシメと搔攫ハシメて投ハシメ難ハシメ。所爲ハシメ。私ハシメども。然ハシメて  
こぶ面目ハシメ。家兄ハシメの爲ハシメああハシメ恥ハシメ。あらわれども初見ハシメああハシメ。將軍ハシメの  
毛ハシメ目前ハシメ。兄ハシメがそ讓ハシメ。之ハシメ頼義ハシメ。家兄ハシメの毛ハシメ悔煩ハシメ。毛ハシメ生涯ハシメの瑕  
瑾ハシメ。所詮ハシメ勝ハシメも眉ハシメ。時ハシメ殺ハシメすまれと。あらん。尋思ハシメと勝負ハシメ

好ま。組方腕を振解て反えし反えされ又組て振ほど。互の秘術。真兵を  
實々踏鳴。一もちる足よ。大地のめち滅。凹まよ。接より半晌をり。勝  
負も果す。君臣宛。醉ゑど。名。最手拔手。大隅隼人。  
阿弓隼人野見宿禰。蹶速。元とも。元より。優。且感ト。且呆  
れ。瞬も。目成。當下行司小坂太郎の假屋のか。ふうち對ひ。距坐竟  
ま声高。既小内する如く。優芳。時と。寝せ。疲勞も。アセ。ソリ。ソリ  
翁役と。義時。候。うち領。兩龍雲間。鬪。鱗と。墜。兩  
虎肉。争ふ。先に。一虎。必傷。左。右。勝負。あ。と。川口  
へ。とり。小坂。告日。傳。常盛。と。義秀。東西。引。且く。息哉。吻セ  
け。アシニ。為体。頼家。感。大。當座。勝負。と。之  
ど。駿馬。同胞。賜。兄。弟。望。取。仰。也。與。兄。弟。望。取。仰。也。  
安。義秀。赤裸。件の馬。修忽。而。乘。馳。安。程。不  
常。盛大。敬。馬。騒。馬。尾毛。釐。取。引。戻。元。と。之。義秀。透  
さ。馬。拍。入。一。中。礎。と。あ。ま。けれ。馬。尾頭。引。離。海。入。余。  
馳。入。常。盛。れ。追。ん。と。水。戲。未。熟。を。と。推。水。水。入。  
ら。波。打。障。抗。返。せ。と。呼。ど。義。秀。耳。も。う。ば。安。房。の。海  
造。成長。水。戲。水。馬。自。由。と。あ。れ。馬。平。頸。うち。越。可。の。波。風。雨  
物。と。せ。遙。前。面。の。澳。中。顯。れ。や。高。巖。乗。乗。を。涸。せ。り。君。臣  
更。ふ。れ。を。不。速。騎。馬。も。り。彼。巖。ま。六。坂。東。道。三。四。十。里。一。里。そ。や  
あ。ん。故。と。く。繩。と。い。身。も。入。り。浩。氣。よ。大。死。鷲。の。波。藏。身。義。秀  
乗。馬。の。後。方。よ。走。り。か。と。と。馬。の。忽。地。骸。骨。と。後。足。け。噉  
斷。き。け。ん。そ。こ。の。廟。水。鮮。血。事。嘲。た。ゆ。主。共。は。波。底。要。流。

け。以ひ子を毫形勢方君臣忽地與醒く。われよくと叫ぶ。五六町をき  
く。澳ゆわれがまくよ。枚よ術もろりけり。是より先は常盛の邊へ衣  
裳を着て。庵うちゆ一はふ澳のうをまち眺めくを。よしの縛の景迹。  
といひう駭憂ひて。義時忠常ホと商量。又浦人と略取合。七八  
ヶ亡駭とも船りて揚至てせんと。まぐらをす。程より義秀を  
波の底。十四五町りや潜り事よけ。忽地波上よ深み。大充き兩隻の  
鰐。左右よ楚定と抱絞て。水際へ因だ暴るこそ。休あづるふ瀕邊よゆゑ。  
件の鰐を投生す。海内を雙の大力ま。吼を扼られ。おけむ。鬼畜ふ等  
した巨鰐。それども血を吐くと。轟く。僅は四足を動か。又生ぐもわざ  
し。君臣うち。舌を啖駭嘆せ。と。お鰐の大死うると。一隻ハ  
八尺ばかり。一隻も此一芳す。り是え。郷向よ浦人ホ。雄二隻の  
大鰐と。く。怕き。り。は。疑ひ。さ。も。と。ぞ。り。よ。要時。鳴。い。け。  
か。わ。浦太郎。假屋の。と。り。進。出。跪坐。セ。く。詣。大  
丈。郷向よ。上。一。ごく。この鰐共。僕が婦父浦平が讐言敵へ年來怨を  
復。ん。と。お。れ。か。ち。及。び。鬱憤。お。も。そ。く。よ。圖。お。勇。士。の。を  
借。く。夙志。と。遂。て。を。ゆ。願。から。今。この。悪。魚。を。一。大。刀。刺。一。く。へ。  
と。又。他。ゆ。も。き。毛。ま。を。義。時。ゆ。く。眼。を。瞪。く。是。奴。匹。之。の。分。際。を  
御所。お。ん。目。前。と。憚。り。ち。よ。正。鰐。妻。親。の。仇。ま。と。云。云。と。き。う。ゆ。  
引。の。程。あ。く。取。白。物。す。く。四。能。り。立。む。や。と。舜。尖。銳。く。叱。られ。浦人。却。ハ  
阿。と。お。り。ふ。応。ひ。も。れ。ど。立。難。く。沙。よ。額。と。瘡。て。き。ち。間。よ。義。秀。い。く  
を。濡。る。刃。と。拭。く。遠。く。衣。裳。と。被。く。義。時。よ。う。ち。對。ひ。相。一  
言。ゆ。この。浦太郎。ハ。匹。され。ども。帰。父。の。怨。三。ある。鰐。殺。え。と。是。が

小壺の  
海より  
雄の鰐  
義秀雌  
を捕る  
也



吉言ノ子 緋夷 卷之二

事。年事を歴々志の根らびて今あよ。お咎もんまで。一大刀刺を  
冀。便是義丈より。編蓬の中。わもかくの如だ。義丈のと。士風  
起。後。までも美談。と。鷦。某が。捕。恩賞。請。まう  
あ。今此浦太郎。刺。まへ。それを不敬。とせられ。おもい咎め。某が  
ひとうあんの。此。まう。を。う。と。辭。せり。く理。と。推。亦浦太郎。うち  
對。汝が所願。の。義。よ。稱。つ。これを。と。ひの。まよ。刺。く。怨。を。復。ふ。と。  
大刀を。貸。まけ。浦太郎。歎。び。く。刃。を。引。抜。登。り。偏。息。き。両  
隻。の。鷦。の。吃。の。む。を。刺。ん。と。す。よ。皮。堅。て。刃。を。受。く。入。刃。尖。を。口。中。へ。突  
つ。ぬ。き。て。刺。苗。は。當。下。浦太郎。の。單。衣。の。袖。を。り。刃。の。鮮。血。を。拭。ひ  
き。り。下。鞆。よ。納。り。く。義。秀。小。返。し。く。要。時。額。と。う。又。御。假。屋。の。下。向  
り。く。額。つ。た。辯。へ。邊。く。舊。の。処。を。退。り。頼。家。こ。れ。を。御。覽。じ。く。  
常。盛。義。秀。と。肩。く。近。く。召。の。后。て。汝。達。が。角。触。の。手。殴。り。何。を。兄。と。毎。何。を。  
宋。と。せん。絶。く。甲。ひ。互。り。之。就。中。義。秀。ひ。水。戯。水。馬。の。衆。人。よ。捷。れる。の。事。を。  
毒。龍。ゆ。も。ま。く。劣。ら。ぬ。兩。隻。の。鷦。と。水。中。よ。輒。く。も。捕。ふ。ま。る。文。学。武  
芸。そ。の。差。あれ。ど。彼。唐。朝。の。韓。退。之。功。徳。よ。伯。仲。ま。だ。り。と。既。ふ。福。物。と。  
牽。し。る。鮮。明。月。毛。悪。兔。の。る。不。傷。け。り。と。底。の。水。屑。と。う。り。と。更。よ。又。座  
右。う。鎧。一。具。と。取。り。て。常。盛。近。日。小。駿。馬。を。え。み。く。賜。る。又。彼。浦。太  
郎。と。う。ひ。漢。支。が。鷦。を。刺。と。願。ひ。て。の。志。神。妙。之。毛。よ。り。漁。獵。の。便。著。と。い。そ  
小。壺。の。浦。人。安。堵。せ。皆。義。秀。が。功。を。あ。ら。ん。鷦。の。翌。す。る。三。日。の。間。こ。あ。处。桀。罰  
し。と。衆。人。よ。安。む。不。旨。あ。と。浦。正。よ。仰。ま。ー。日。も。そ。や。西。よ。没。ん。と。モ。え。れ。ば。げ。の  
遊び。へ。是。ま。ご。と。義。秀。へ。常。盛。共。侶。今。宵。ひ。且。宿。所。よ。退。り。と。翌。す。る。營。中。よ  
あ。り。仕。へ。よ。ま。う。の。言。教。と。叮。喧。よ。嘵。え。ま。う。せ。く。黒。革。威。の。鎧。一。枚。と。賜。焉。

誘久らんと立せゆ。是時忠常以下の近臣雜色奴隸至るまで前駕後  
事の隊伍を整先追ひまゝ警蹕の声りやを黄昏時陸續して齊々  
入りゆき常盛義秀の濱邊よもぐく跪坐く恩を謝し拜し別れ目送り  
まことに平暗をも身と起えんとてけふり程す浦太郎も膝折俯く後  
方ふぞう義秀が袂と引く朝夷大人憚りまく等せ又嚮ゆきよめを好  
情ゆく鰐を刺すゝ鬱憤と散くる然びに辭よ述も畫一くて年ごとて  
をもらん僕の陸奥ゆく大さきぬ恩と稟うる彼藁巻二郎が異父兄  
弟ふ小名穂之助と仰れりゆく就く竊よやうづき。一條の山へ早く苗  
至りりと又他よりもよくりひあまけり畢竟浦太郎が義秀を詰留  
ゆく又甚麼る話説うわふ。その次の卷よ解分るをよそく知らん。

朝夷巡嶋記全傳第六編卷之二終

